

第40回 こうへ市民文芸

短編・エッセイ部門

夜明け前

北川 晴 茂

「もうぼちぼちなあ。来る時期やなあ」

無精髭のはえた顔を少し赤らめながら店長が独り言つ。

「誰が、来るんですか？」

菊正宗酒造の百黙をちびりちびりすりながら、わたしは店長に訊ねる。ここは神戸市長田区にある居酒屋「安寿子」。店名は、95年の震災で他界した店長の奥さんに由来するのだと聞かされていた。

「寅さんや。寅さんが来るんや」

適度に焦げ目がついたホツケの塩焼きを丁寧にはぐしながら、初めて聞く名前に興味を抱いた。その響きから、俳優の渥美清を想像した。ここ長田は確か、あの映画のロケ地にもなっていたはずだ。

「あんた、まだ寅さんに会ったことないんやっとな

あ。うちに通ってくれるようになってから日が浅いもんナ」

店長は先ほどお猪口に注いだばかりの櫻正宗を一気に飲みほしたあと、無言で幾度となく溜息をついた。何か込み入った事情があるように思えた。けれども、店長の表情からそれ以上聞くのとはばかられた。もう、店じまいの時間ということもあり店内にはほかに客はいなかった。外は雨が降っていて、車のタイヤが水溜りの水を弾く音が妙に大きく響いていた。わたしは話題を少し逸らした。

「寅といえはタイガース、昨年は残念でしたね。甲子園球場の100周年記念をリーグ優勝と日本で飾れませんでしたね」

店長はそうやなと小さくつぶやきながら厨房を出

た。それから店のドアを開けて暖簾を仕舞った。時計を見ると午後11時を過ぎていた。ろれつが回らない口調で店長が、16日にまた来れるかと聞いてきたので、大丈夫ですよと伝えた。勘定を済ませ、壁に掛けてあったコートを羽織った。雨はいつの間にか雪に変わっていた。ボタ雪だったので積もったりはしないだろうが、冷え込みはさらに厳しくなるだろうと思った。



店長との約束の日、少し遠回りして東遊園地に立ち寄った。園内では明日の式典のための準備が進められていた。三宮から電車に乗り新長田駅で降りた。駅から少し歩くと店の赤ちようちんが見えてきた。暖簾をくぐり、それほど広くもない店内を見渡した。見慣れた常連客の中にひとり、知らない男性を見つけた。店長の言っていた「寅さん」だと思った。店長がわたしを今日誘ったのはきつと、この男性に新入りのわたしを紹介したかったからなのだろうと思った。マフラーを外してコートを脱ぎ、その男性に声をかけた。

「こんばんは」

男性は喪服を着ていた。明日は1月17日、阪神・淡

路大震災で被災した人々にとって特別な日である。

「こんばんは」

しゃがれた声をめいっばい腹の底からかき集めたような発声だった。80歳くらいだと思った。頭髮はすっかり抜け落ち、顔はシワだらけだったが、目つきがとても穏やかだった。寅さんですねと訊ねると、大きく首を縦に振った。そして、おもむろに語り始めた。

「明日、家族の31回忌ですねん。自宅の下敷きになつてしまいましたな。妻も子供らも、みんないっぺんに持つていかれましたわ。仕事で夜明け前に家を出とつたワシだけが生き残つてしまいましたな」

自身の身に起きた悲劇を、誰かれ関わらずしゃべつてしまいたい。そうすることで、自身の過去に折り合いをつけたい、そんな人にこの街では何人も会つてきた。だから、寅さんの唐突な語りにも違和感を抱かなかつた。すべてを諦観したかのような作り笑いを浮かべていたが、目頭は真っ赤に充血していた。

「その家はな、地震で全壊した寅さんの自宅はな、この場所にあつたんやで」

店長は今まで見たこともないような険しい顔つき

で床を指差した。

ここは神戸市長田区。あの震災で最も被害の大きかった区域。今でも、ふとしたきっかけて震災直後の風景が脳裏に鮮明に蘇ってくる。倒壊した家屋、隆起し分断された道路、収まらぬ火の手、鳴り止まぬ救急車のサイレン、空を飛び交うヘリコプターの音。あの地震は、平穏な神戸の街から一瞬にして、何もかもを奪い去ってしまった。

寅さんは震災のあと東京に移り、いまも八王子で暮らしているらしい。数年前に腎臓を壊してから、生活保護を受給しながら人工透析を受ける日々を送っているようだ。『安寿子』がオープンして最初の震災の日の前日にふらりと店に現れたという寅さん。店長とはそれ以来の間柄ということになる。

「明日の朝、時間ありませんか？ よろしければ一緒に東遊園地へ行きませんか？」

わたしもあの震災で祖父母と叔母を亡くしていた。あの日のあの時刻ちょうどに黙祷することで用いできると信じ、早朝の東遊園地での式典に毎年参加していた。今年も店長の奥さんと、寅さんのご家族の分まで祈りを捧げようと思った。



翌朝、始発の阪神電車に乗って東遊園地に向かった。こんな早い時間だというのに、車内は人であふれかえていた。その中に、母親に抱かれた幼い子供の姿があった。ふと、その母親はもしかしたら震災以降に生まれた世代なのかもしれないと思った。30年前のあの瞬間を昨日のこのように思い出す人も、教科書で歴史として学ぶ人も、この電車には乗っているのだろう。震災で全てを失った人も、震災後にこの街へやってきた人も、いま、この電車に乗っているのかもしれない。各々がそれぞれの想いを抱いて、電車は神戸三宮駅へ到着した。

店長と寅さんとは神戸阪急の入口で合流した。3人とも朝食をまだ食べていなかったの、コンビニで肉まんと珈琲を買い、バス停のベンチに腰をかけて食べた。それから人の流れに従って歩いた。ただ黙々と、何も話さずに歩いた。辺りはまだ真つ暗で、凍てつくような寒さだった。

「あの日の朝も、寒かったよなあ」

店長が口を開いた。

「そうでしたなあ。とても寒い朝でした」

寅さんが相槌をうった。

東遊園地では手書きのメッセージが書かれた竹の

筒が何千個と並んでいた。蠟燭が筒の中で赤々と燃えていた。

「もうすぐやなあ」

「もうすぐです」

スピーカーから時報が流れはじめた。5時46分ちよほどを伝えた直後、会場は静寂に包まれた。

『……黙祷……』

式典が終わり、しばらくすると東の空が白みだした。そろそろ夜が明けるのだ。寅さんは吹っ切れたような晴れやかな表情で、陽が昇るほうを見ながら言った。

「実はね、今日を最後に人工透析をおしまいにしよう決めておったんです。なんやかんやで生きていくのに疲れましたね。でも、さっきね、黙祷しているときにね、妻や子供らの声が空から聞こえてきたんです。父ちゃん、生きろ！ 生きろっ！ てね。だから、もうちよっと生きてみることにしました」

店長はニヤリと笑った。

「寅さんは昨年もその前の年も、確か同じこと言うとったよね」

寅さんが少しはにかんだように見えた。わたしは

寅さんにエールを送った。

「長生きしてくださいな。また来年“安寿子”でお会いしましょう」

2025年・復興を遂げた神戸の街は、更なる発展の真ただ中にある。 《終》

選評

西村 恭子

全てがタイトルに収斂していく。長田区の居酒屋。新米の客に店長が言う。「寅さんが来るんや」。現れた「寅さん」は喪服姿。夜明け前、ひとり出かけた為に家族を失った場所に。その三人が織りなす構成は、忘れようのないあの日と30年後の今を静謐に満たしていく。共に東遊園地に向かう成り行きも自然。それぞれの日々がどうあれ、想いを抱いてあの日から生きて来た、生きて行く。そんな人々の中に居て、やがて東の空が、。余韻が覚めない作品に仕上がって秀逸。

ハルオとトンボ

佐々木 恵美

日傘をさしていつものように、俯き加減でトボトボとマンションまで辿り着いた。

ふと顔を上げたら、隣の部屋に住む小学生のハルオが立っていた。

「あ、ハルオ」

「あ、赤山さん、鍵、鍵、お願いします。こんにちは」

「ん、こんにちは」

オートロックを開けながら、ハルオの姿を改めて見た。両手が塞がっていてインターホンも押せなかったらしい。

雨でもないのに長靴を履いて、小さな透明のケースを首から下げている。

右手には魚取り用の網、左手には大きくふくらん

だスパーの袋を持っている。

ランドセルも背負っているから、学校帰りのようだ。

「それ、何がはいってるの？」

ケースを指さして尋ねると、ハルオは私を見上げながら唇をゆがめ、「赤山さん、これ重たいんだよ」と、網を握っている手から人差し指だけ伸ばしてケースを指さした。

一度「おばさん」と呼んだのを注意してから、ハルオは表札にある名前通りに私を「赤山さん」と呼んでいる。

小学二年生でも読める漢字だからか、それとも親に聞いたのか知らないが。

私は片手でケースを持ち上げ、ハルオの首に掛か

ったその紐を外してやった。襟元から立ち上る、気持ち悪いくらいハルオの熱気を指先に感じた。校帽の下に見える髪の毛も、シャワーを浴びたように汗で濡れている。

そのまま一緒にエレベーターに乗ると、

「今日ね、学校のプールからヤゴを救出したんだよ」と、ハルオは誇らしそうに話し出した。

水を抜いて上級生がきれいに掃除をする前に、プールで育っていたヤゴを、みんなで助け出したということらしい。

「見て！」と言うから、ケースを持ち上げて覗いてみたら、濁った水の中に動くものがあるのがわかった。正直、はつきりとは見たくもなかった。

そうしているうちにエレベーターは8階に着いた。

両手のふさがっているハルオのかわりにチャイムを押してやると、しばらくしてハルオの母親がドアを開けた。毎度おなじみの観察するような目でヌリと私を見る。

母親はヤゴの入ったケースに気がつくといきなり、「ヤゴなんか貰ってきちゃだめって、今朝ちゃんと言ったでしょ！」と、怒鳴ったのだ。

「だって、山田先生が、ヤゴの観察、宿題だって……」

そう説明し始めるハルオを、「いいから早く入って！」と、母親は玄関に引つ張り込み、ドアを閉めるなり音高くロックした。

そうして私の手には、ヤゴの入ったケースが残ってしまった。

「それで、今度はヤゴなんですな」

ベランダに置いたケースを見て、うちの赤山さんが言った。髭面で頭をぼりぼり掻いているのが演出家の赤山さんで、本当は、私は「赤山さん」じゃない。

ハルオの母親もうつすらそのことに気づいているらしく、隣りは夫婦じゃならしいと、ご親切にご丁寧に、近所に漏らしてくれている。

「ヤゴは、生きている糸ミミズやアカムシしか食べませんよ」

「そうなの？」

「生きているバッタとかでもいいかもしれないけど、どこで見つけます？放っておいたら、共食いするかもしれないね」

いやだ。共食いはいやだ。

「ねえ、またどこかで逃がしてきてよ」

今までも、「お母さんにダメといわれたから預かって!」と、ハルオから様々な虫を押しつけられた。モンシロチョウや、アゲハの幼虫とか、テントウ虫、ダンゴ虫……。そのたびに、赤山さんに捨ててきてもらっていた。

ハルオも、預けただけで満足なのか、あとは見にも来ない。「どうしたの?」と聞かれたら「逃げちゃった」で話は済んだ。逃がしたのじゃなく、逃げちゃったのなら仕方がないのだ。

「でもこれ、ハルオくんの宿題なんですよね?」

そうだ……。ハルオはヤゴの「観察」をしなければならぬのだ。

次の日、赤山さんは釣具屋で糸ミミズを買ってきた。午後にはハルオがやってきて、「観察日記」を書いた。その次の日は休みだったから、三人でバツタを探しにいった。

赤山さんと、赤山さんのアイジンの私と、赤山さんの隣のハルオ。

なんだかおかしな組み合わせだ。

それから三日が経った。赤山さんは撮影でマレー

シアに行ってしまった。たぶん、奥さんも一緒だろう。

私はくさくさして部屋に居る気になれず、友達のところを泊まり歩いた。どこへ行っても、「そうやって呑んでくれるんなら、いい加減にアイジンなんかやめなよ」と嫌がられた。ふん! 私たちの歴史も何も知らないくせにと、その時は思う。けれどひとりになると考えが変わる。

確かにそうなんだ。どう考えたって、いつまでも赤山さんの手の中にいないで、出て行くことを考えるべきなのだ。

あのマンシヨンもハルオ母のおかげでだんだん住み難くなってきたし。

でも……とか、やっぱり……とか、考えながら、とりあえず赤山さんに与えられた部屋に戻った私は、部屋に入ってカーテンを開けて、そこで初めてヤゴのことを思い出した。

慌ててベランダに出てケースを覗くと、もうヤゴは一匹も見当たらなかつた。

代わりに羽のひしゃげたトンボのようなものが、いた。

それはまったく動かなかつた。

蓋なんか、締めておくからだ。

どうしよう。

学校が終わるのが何時かわからないけれど、やがて、今日もハルオが「観察」にやってくるだろう。

私は、何も直視しないようにしてケースの中身をゴミ袋に開けた。

それから部屋の中をぐるぐる歩き回りながら、トンボが飛び立つ様子を懸命に想像し、目に浮かべ、何度も何度もハルオに話して聞かせる「嘘」の情景を練り直し、セリフを練習した。

そのうちにその情景が、だんだん本当のこのように思えてきた。

わたしは早くハルオに会いたくてたまらなくなっていた。

「ねえねえ、ハルオ、ハルオにも見せたかったな！ トンボがね、この小さなケースからね…」と、話すのだ。

ハルオをベランダに連れ出して、あの空を指さして！

きっとハルオは目を輝かせて聞いてくれるだろう。

ああ…

ごめんね、ハルオ。

私は大嘘つきだ。

でも、トンボの代わりに、私がちやんと飛び立つことにするよ。

ここには蓋なんかないんだもの。

私はヤゴでもトンボでもないんだもの。

きみは「赤山さんはどこ？」って聞くかな。そして赤山さんがきみに言うね、

「逃げちゃった」って。

選評

西村 恭子

冒頭の四行から読ませる。主な人物は赤山さんと赤山さんのアイジンの私と、マンシオン隣家に住む少年ハルオ。アイジンの私はこれまでハルオにモンシロチョウやてんとう虫、アゲハの幼虫などを押し付けられ飼う羽目に。今回は「ヤゴ」。会話体で進む展開は淡々。「観察日記」を書きに来たハルオと赤山さんとバツタを探しにでかけたり。やがてトンボになるはずだった「ヤゴ」が赤山さんのアイジンの私にもたらしめたものは何か、ラスト一行が光る。

私間違つてない

宇 貞 み き

「えっ？ なんやて？ 大きい声で言え」

電話の向こうで父が怒鳴る。

「私、すごい大きい声で言うてるんよ。おとうさん、かなり耳悪うなつとるんよ。やっぱりもう補聴器使つた方がええんやわ」

私も怒鳴り返す。いつもこうなのだ。

父は、おまえの声が小さいからや。わしの耳は別に悪うない。岡崎さんと話す時は、なあんも困つとらん、と言う。ちなみに岡崎さんというのは実家のお隣さんで、父と同年代のご夫婦である。おそらく、お互い大声で話しているのだろう。

今日は、言い方を変えてみることにした。

「ねえ、おとうさん、私もそろそろええ年になってきたから、一遍ちゃんと聴力検査を受けてみよう」と

思うんよ。どうせなら松山耳鼻科で。久しぶりに松山先生に会いたいし。でもあんまり久しぶりでちょっと照れくさいから、一緒に行ってくれへん？」

松山耳鼻科というのは、小さい頃、鼻風邪を引くたびに連れて行つてもらつた近所の医院である。

「でも、おまえ、仕事は？」

「有給取るわ、沢山残ってるから」

「そうか、そうか。おまえ、ずっとあの先生に診てもらつてたもんな。よっしゃ、ほな、とうちゃんがまた連れてつたら」

父は上機嫌でそう言った。

作戦成功である。これで、一緒に聴力検査を受ける流れにすればよい。

父がこれから少しでも生活しやすいようにしてお

いてあげたいのだ。

「今日、父のところに行ってくるわ」

と言うと、夫はちよつと心配そうな顔になった。

「一人で行ける？週末なら一緒に行けるけど？」

「ううん、大丈夫。父と二人きりで会っておきたいから」

と答えると、夫は私の気持ちを察したようで、じゃあ気をつけて。途中でもし気分が悪うなったりしたら、すぐに連絡してな、と言った。

うん、ありがとう、と私は言い、もう来週の準備は全部できてから暇やしね、と付け足した。夫はわずかに顔を曇らせ、何か言いかけてやめ、もう一度、気をつけて行きな、と念を押してから出勤していった。

私は夫と同じ会社に勤めている。今、長期休暇を取っているのだ。来週から入院して、手術を受けるからだ。この数年の間に何度か入院はしてきたのだが、短い期間だったので父には言わずにいた。心配をかけたくなかったのだ。でも今度の入院は長くなりそうだった。はたして今までのように父に黙って

いてもよいのか、迷うところだった。

電車を乗り継いで実家に向かった。

五年前に母が亡くなってから、父はここで一人暮らしをしている。

着いてみると、父は庭で草むしりをしていた。おとうさん、と何度か後ろから声をかけたけど、振り向かない。前に回って、おとうさん、と大声で言うとおう、来たか、とやつと気づいて立ち上がった。やはり相当耳悪いな、と苦笑いしてしまう。

一緒に家に入り、母の仏壇に手を合わせてからお茶の用意をした。台所は片付いているから、たいして料理もしていないのだろう。母が亡くなった時、父に私達のところに来て暮さない？と提案したのだが、いや勝手知ったるところでのんびり暮らしたい、と断われた。私が定年退職したらもう一度ちゃんとお話し合おうと思っていたのだが、うかつなことは口にできなくなっている。

二人で松山耳鼻科まで、ゆっくり歩く。よう車で連れて行ってやったなあ、と父はなつかしそうに言う。父は今車の免許を返納している。

松山先生は私のことを覚えてくれていて、もうお孫さんがおられるようなお年かな？と聞いてきた。いえ、私は子ども、いないので。でも、もうおばあさんって年なんで、聞こえの検査をしていたかどうかと思って、と私は笑って説明した。先生、よう診てやって下さい、と父は横から口をささむ。どうやら自分は付き添いのつもりらしい。

聴力検査が始まった。ヘッドフォンを付け、ピーンという音が聞こえるたびに手にしたスイッチを押していく。だが、やっていくにつれ、だんだん自信がなくなっていく、なにもかも間違っている気ささえてくる。

あともう少し不妊治療を続けた方がよかったのだろうか？あと少し、もうちょっと、とがんばってきたけど、すっかり疲れてしまったな。

病気がわかってからはどうだろう？一生懸命考えたり調べたりして治療法を選択してきたつもりだが、今回の手術は？自分では納得しているのだけど、これは正解なのか？ぐるぐるといろんな思いが頭の中を回る。

「はい、終了です。問題ないですね」

ふいに松山先生の声が聞こえた。

せつかくですからおとうさんも一緒に検査を受けられては？と先生に勧められ、そうだな、ほんついでに診てもらいましょか、と父は案内素直にヘッドフォンを着けた。そして、先生早う始めて下さい、などと言い、もう始まつてるんですよ、などと言われて首を傾けている。要するに聞こえてないわけだ。

結局、父は後日もう少し詳しい検査を受けて補聴器を作ることになり、私はほっとする。

「おまえの言うとおりにやったなあ、おまえは子どもの時から真面目で賢い子やったもんなあ、おまえの言うことは間違いないやわ」

駅まで見送ってくれながら父はしみじみ言う。そうよ、と私は笑い、少し考えてから

「あのね、おとうさん、私これから仕事がしばらく忙しなるのん、電話もなかなかできんかもしれんけど心配せんといてね」

そうか、と父はうなずき、実はこのごろかあさん

がよく夢に出てきて、まだこつち来んといて、あの子のそばにおったって、言うんや、と言いだした。

母はあの世でも私のことを心配してくれているのか、と胸を衝かれた。

「おとうさん、子どもも孫も見せてやれんでごめんね。親不孝やね」

ふいに松山耳鼻科でのやりとりが思い出され、私がそう口になると、父は思いがけず強い口調で、

「そんなことはどうでもいいんや。子どもが元気で幸せやったらそれでええ。何よりも大事なことは、親よりも長く生きることや」

と怒鳴った。単に耳が遠いから大声になったのでもなさそうだ。

母より長く生きられたのはよかったけど父より長く生きられるかはもう自信がない。

もう駅前まで来ていた。

「おとうさん、私、実は」

思い切って口を開いた時、父は急いで腕時計に目をやり、電車来るで、早う行かんか、と促した。

「今日はありがとさん。おまえのやることは間違いないんやから、しっかり仕事がんばって、一段落したら今度はゆつくり帰ってき」

父は早口になっている。目の縁が赤い。

父は気づいていた。

「うん、そやね。絶対帰ってくるから」

父が気づいていることに気づかないふりをし、明るく手を振って改札口を通った。

振り返ると、父はまだそこに立っていて、大きく手を振っていた。うなずきながら。

私も、大きく大きく、手を振り返した。

選評

葉山 はずみ

五年前に母が亡くなり独り暮らしをしている高齢の父の耳が遠くなってきた。頑なにそれを認めようとしない父を病院へ連れていくために「私」の付き添いを頼む。そのついでに父の検査もしてもらう。案の定、父の耳は遠くなっていた。手術を控えた私は父に仕事で忙しくなるからと嘘を伝えるが、父はそのことに気が付いた上で知らないふりをする。耳は遠くなったとしても娘の心の声はしっかりと父に届いている。父の娘の愛情が心に沁みた作品。

みどりの芝生

ノエビアスタジアム神戸の場内がテレビに映し出され、グラウンドのみどりの芝生を見ると、目の前に浮ぶ想い出がある。

戦後、ノエビアスタジアム神戸の辺りは、競輪場だった。周りは戦火の爪痕を残したままの痛々しい広っぱで、雑草が生い茂っていた。競輪場から東へ三〇〇メートル余り先の広っぱの端に、焼け残ったレンガ塀があり、それに沿うように小さな保育所がたっていた。

当時は、戦後復興のため女性の家庭外就労が始まり、それに伴う託児需要の高まりに対応し、神戸市は、市内の四か所に簡易保育所を設置した。広っぱの片隅にあるのもその一つで定員幼児三十名、保育

士三名の市立保育所だった。園舎は市電の廃車二両を連結し、更にL字型に、進駐軍の犬舎だったトタン葺の小屋を遊戯室として並べ、周囲をフェンスで囲ったもので、外観は見窄らしかったが、子ども達には「電車保育所」の愛称で親しまれていた。

昭和三十三年春、胸躍らせながら私はこの「電車保育所」で保育士としての一步を踏み出した。ここでの日々は新鮮な体験お連続だったが、別けても競輪場の存在は大きく思い出深いものがある。

競輪開催日となると、市電から吐き出される人の他にどこからともなく男達が集まり、列をなしてどろりどろりと競輪場に向って行く。場内で「カンカンカン」と打ち鳴らす鐘の音は脳天まで響く。午後になると当て外れでか、酔った風体の男達が何故か

吉 田 ちず子

保育所の周りを彷徨き、時にはフェンスの際で小便を放つ者もあり、フェンスには朱で鳥居を描いた板片が二か所張りつけてあった。

不気味に思いながらも、競輪場とは一体どんな所なのだろうとの私の好奇心が切掛けとなり、八月のある日主任、先輩と一緒に出かけることになった。一人一枚づつ車券を買って入場すると丁度レースが終ったようで、場内は歓声と唸り声が混ったような大音声であり、観覧席の男達の手を振り体をくねらす姿の異様さに恐れながら着席し、正面を向いて驚いた。そこにはみどりの芝生を敷き詰めた広場があり、芝生の真ん中の大きな花壇にはカンナの花が赤々と咲いている。何とまあ、美しく豪華な景色である。「ちょっと、これなによ」と隣に座っている先輩の独り言が聞える。「おかしいですよね」と私も呟いた。

保育所には子ども達が遊ぶための庭はあるが狭く、一面に川砂利が敷き詰められ、歩くとじゅりじゅり音がする。石の大きさは四、五才の子どもが握りしめるのに程よく、毎朝子ども達を集め「石を投げないようにしましょう」と主任が囁んで含めるように話しかけているが、時には額にこぶをつくり泣

き叫ぶ子どもがいる。フェンス側にほんの少し花壇はあるが樹木はなく、見渡すかぎり保育所の周辺には、子どもの目を楽しませるようなみどりの景色など見あたらぬ。だのに、賭けことに戯れる男達のところは何故こんなに美しい景色があるのか。おかしいと思った。

その日から暫たったある朝、九時半頃だったと思うが「子ども達を集めてください」との主任の大声に何事かと驚いた。主任の話すには、先日競輪場の関係者に「子ども達に競輪場の芝生の美しい景色を見せてほしい」と頼んでいたところ、たった今知らせがあり「今から直ぐだと入場可能」とのこと。余りにも唐突すぎるが、子ども達は園外に出かけると分ると大喜びした。子ども達には行先を知らせていなかったもので、競輪場の入口で止まると「ここ競輪場や」と怪訝そうな顔をしてざわついたが、主任が「静かに」とジェスチャーで示すと、急に緊張した面持で行儀よくゲートをくぐり競争路に出た。その瞬間、「うあー」と子ども達は歓声をあげた。中央の広場の芝生は、初秋の日射しを浴びてみどりが耀いて見える。花壇のカンナに花は、陽の光を十分吸いこんだように生き生き咲いている。観客のいない場

内は広々として明るい。

「広いなあ」「きれいなあ」「赤い花可愛いー」
子ども達は感激をすぐ言葉にして喋りだす。と突然一人の年長児（五歳）が競争路を走り出し、続いて四、五人が走り出した。

「まって、まだ走ってはだめ、止りなさい」と主任が大声で呼びかけるが、子ども達は止らない。たつた今着いたばかりで、子ども達にここでの注意ごとや約束ごとなど話していない。主任の焦る様子を見て、咄嗟に私は先頭を走る子どもたちの名前を呼びながら「待ちなさい」と後追いつた。しかし子ども達はどんどん走る。競争路は播鉢状に傾斜しているので走りにくい。先の子どもが脱ぎ飛ばしたゴム草履を拾っている間に、後から走ってきた子ども達が追い抜いて行く。振り返るとみんな一団となつて走っているようだ。

どの子どもも走つた、走つた、私も走つた。円周の中程か少し手前あたりで先頭の子どもがしゃがみ込み、そこが到達点のように次々と走つてきた子ども達はしゃがんだり、仰向けに寝転んだりしながらハアハア肩で息をしている。最後に三歳の女の子が担任に手を引かれゆつくり到着した。

保育所の子ども達が全速力で走る姿を始めて見た。どの子ども達もよく走るのに感心しながら、日頃保育所でも、もつと走りたいのだろうと思つた。子ども達の回復は早く「先生もつと走りたい」と言い出したが、今度はみんな一緒に走ろうと約束した。十分休息してから主任が先頭になり、みんなで走つたり、歩いたり、止つて歌をうたつたりしながら競争路一周を廻り終えた。唯一人として転んだり擦り傷を負う子どもはなく、みんな笑顔で「ありがとう」の言葉を残し、競輪場を後にした。帰る道々子ども達は「先生明日も来たい」「今度いつ来るの」と口々に言うが、主任は「またね」と応え、それに倣つて私も「またね」と繰り返しながら歩いた。競輪場など然う然う子どもが行く場所ではない。「またね」のまたの日は二度とこなかった。そして、その年の年度末に市内四か所の簡易保育所は閉鎖され、それぞれの近くの近くの場所で、運動場を備えた新築の正規保育所として生まれ変わった。

近年ヴィッセル神戸は勝負強い。必勝を祈願しつつテレビをつけた。ノエビアスタジアム神戸の場内が映し出され、試合寸前のグラウンドが画面に広が

る。芝生のみどりは今日も鮮やかである。

終

選評

葉山 ほづみ

昭和三十三年、ノエビアスタジアム神戸の辺りに競輪場があり、その近くに市電二両を繋げた『電車保育所』があった。そこで保育士として働きた。競輪場からは脳天まで響くカンカンカンという音が響き、酔っ払いが保育所の周りを歩く。ある日その競輪場へ足を踏み入れることになった。競輪場の中には緑の芝生があり花々が植えられていた。園児たちにそれを見せたい。保育士たちは競輪場に頼み、園児をその芝生へ連れていくことになった。戦後、最低限の設備の保育所と夢のような芝生のある競輪場。その対比も保育士としてその中で必死に子どもたちを思う姿が印象に残る。

揺れる

後 藤 康 子

「地震やでえ、机の下に入りい」

「お母さん、大丈夫？」

私の絶叫に、隣の部屋から母親を氣遣う子どもらの声がある。

ドシャーン、ガチャンガチャン、バサッバサッ、ギー、これまで耳にしたことのない音が、あちらこちらからする。地の底から何かが突き上げてくる。

揺れと震えが止まらない。これまでに感じたことのない不安が走る。恐ろしくて、不気味で……。

暗闇の中、電灯のひもを何度も引くが、ぶらりと大きく揺れるだけ。

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が起きた。団地6階で、母子3人、これまで体験したことのない揺れに遭遇。恐る恐るカーテンを

開ける。夜明けは、まだだ。「とにかく外に出よう、毛布を一枚ずつ持って」足元が危ないから靴下を履きいや」重い玄関ドアを開けて、3人ホッとした顔を見合わす。暗い階段を降りて避難場所の小学校に向かった。

グラウンドに続々と人が集まってくる。誰もが寒さと不安で凍りつきそうな顔をしている。

西の空の赤い炎が牙をむいて襲ってきそうだ。「長田の方やなあ」「真っ赤やなあ」。漆黒の闇の中、押し殺したような声が周りから聞こえてくる。地の底からの揺れが絶え間ない。

数年前に離婚した私は、女と子どもたちだけの暮らしを、どうしようもなく恐ろしく感じた。まず現状を親に報告しようと、公衆電話の長い列に並ぶ。

遠く離れた九州のテレビ報道ではピンとこなかった父も、緊迫した私の声に、とにかく帰ってこいと言いつ張った。

頭のなかを整理できぬまま指定された図書室に戻ると、みんな無言で震えている。

後で聞いた話だが、神戸の惨状を知った父は、仕事中の弟夫婦を早退させ、すぐに神戸の私の許に向かわせたという。

「水とおにぎりを持てるだけ持って伊丹に飛んだ。でも尼崎から先は交通手段がなくて一步も進めなかった、泣く泣く帰ったんよ」弟は言っていた。

時折やってくる揺れの中、娘の勤める老人ホームから避難場所の小学校に迎えの車が来た。須磨区の中腹にあるホームは、比較的被害も少ないという。

介護士の娘は通常の仕事をし、私と息子も、そこに避難することになった。あわただしく動き回るスタッフたちと、物珍しそうに私たち母子を眺める利用者の中で居心地の悪さ、どうかしなくては、と気持ちだけが焦る。2日間、そこで世話になった後、娘を職場に残し、息子と九州の実家に帰ることを決心した。

明石方面までバスを乗り継ぎ、JRで姫路まで行

く。やっと新幹線に乗車、自身の裡では揺れが続いているのに、車内には地震の影さえもなく日常が繰り広げられている。

この地震は、野島断層のずれによる震度7.3の都市直下型だという。神戸市街地の被害は甚大で、ガス・水道・電気などの生活インフラは絶たれ、新聞社・病院なども被災し、広範囲において全く機能しなかった。

小倉（こくら）で、新幹線から特急に乗り換え、故郷の大分駅に着いたのは夕方近かった。実家の木戸に立つ私と息子に両親は縫りつかんばかりだった。「大変やったなあ。ゆっくりしいや」母はふたりの顔をなで、確かめるように足元へと手を滑らせた。「もう神戸には帰るな、暮らし向きは父ちゃんが何とかする」父のことばが続いた。

九州にも神戸の惨事はテレビで流れていた。

勤務先のある長田区はとても目の向けられる状態ではない。ぐちゃぐちゃに壊れた家々が映し出されたが、以前と同じ姿の我が社にほっと胸をなでおろした。

（神戸に帰るべきか、あの中で母子やっていけるのだろうか？）数日を過ぎすうちに、考えが次々と頭

の中を巡る。

「今、九州の実家に帰っています」まずは報告、と思つて勤務先に電話をする。「神戸から逃げたんか」社長がいきなり言う。私には、返す言葉がなかった。

（やっぱり神戸に帰ろう。私には仕事がある。両親に迷惑はかけられない）結局私は、息子を実家に残して神戸に帰ることを選んだ。唇をかみしめ、きつく目を瞑っている父を、背中を感じながら……。

新神戸駅に着き、在来線に乗り換えた。変わってしまった窓外の景色に言葉が出ない。瓦礫の山となった街、かろうじて残った屋根のブルーシートが風に揺らめいている。

住まいの団地は半壊証明が出ていて、とても住める状態ではない。姉のように慕う塩屋に住むY子宅に身を寄せることになった。時々揺れる布団の上で、私の気持ちも揺れに揺れる。塩屋の山の上も断水しており、彼女は一日に何度も給水所に走る。この非常時に家族の食事だけでも大変なのに、居候の私のことまでやってくれる。ますます小さくなつて暮らすことになった。「ごめんね」私は繰り返す。

「こんな時は、お互いさまや」姉御肌のY子に反対に叱られもした。もっと明るく笑顔でいるべきだっ

たのに、私にはそれが出来なかった。

会社最寄りのJR新長田駅付近の盛土が崩壊し駅設備が全壊して利用できない。播磨方面から通勤している社長が、遠回りして私の送迎をしてくれることになった。毎朝待ち合わせ場所まで送ってくれるY子の優しさに、嬉しさと申し訳なきが私の裡に同居する。それにもまして、普段はことばも交わさない社長の高級車に客のように乗る自分がコチコチに硬くなって身動きさえできなかった。

建設会社に在籍している私は、日常業務の他、社員のための炊き出しをし、おむすび作りなどもやる。住宅建設などを手掛けていた我が社だが、震災後は倒壊した家屋の後処理に走り回っていた。直後に、全壊の家屋を掘り起こし、瓦礫の下から変わり果てた遺体を引きずり出したこともあった、と若い社員が青い顔をして言っていた。心が潰れそうになりながら、ただただ目の前のことに向きあい、進むだけの毎日だった。

3か月ほどして団地の我が家に戻れることになった。テレビが壁の前まで移動。本箱は倒れ、すべての書物が畳の上に散らばっている。洋服ダンスと整理ダンスは部屋の真ん中に鎮座。キッチンでは、扉

が開いたままの冷蔵庫が、部屋の真ん中のテーブルとくっついている。食器棚の扉も全開、その前に陶器やガラスの破片がごみの山だ。悲しいのを通り越して、茫然となって眺めるだけ。

娘は職場に泊まり込み、息子は九州から帰って来た。彼は毎日のように弁当支給の列に並び、2人分の貴重な食事を支えてくれた。

電気と水道は使えるようになっていたが、ガスは、まだ使えない。元町高架下で、煮る・焼く・蒸すなど一台何役もこなす電気鍋と、ほとんどが割れてしまった食器を調達した。間に合わせの食器とそろそろ出始めた食材での生活がしばらく続くことになる。

小学校のグラウンドに自衛隊の風呂が設置された。カーキ色のテントに囲まれた広い風呂に浸かり、久しぶりに腹の底から息ができたような気持ちになった。筆筒類の移動をボランティアにお願いすると3人の若者が来て、馬鹿でかい筆筒を元の位置に戻してくれた。結婚時、父が神戸のデパートで買ってくれた筆筒の前に立ち、以前の生活が取り戻せそうな気がした。

地が揺れ、心が揺れた日がずっと続いた。大震災

という未曾有の出来事に遭遇し、恐怖と不安に慄く一方、人の暖かさ命の大切さを感じて必死に生きてきた。神戸での震災体験が私を強くした。

来年1月17日、あの日から30年がやってくる。

選評

西村 恭子

1995年1月17日午前5時46分、あの揺れがもたらした壊滅的な惨事はそれぞれの人に語り尽くせない記憶として残る。その中で起きた苦悩、葛藤、錯綜、家族の思い、それらがこの作品の中でリアリティーを持って語られる。地の揺れ、心の揺れの中からやがていのちはかけがえなく、人は温いに至る。そしてほのかに見えるそれぞれの歩き方、暮らし方、生きる方向。それがタイトルに結ばれる。幾多の揺れの一つの記録として。

星を齧る

私が昔住んでいた家の先には、子供の頃、缶蹴りをして遊んだ神社があります。神社の下には河原があつて小川が流れています。河原が私の通学路でした。河原の土手には道があるのですが、私は季節が感じられる河原の方が好きな子供でした。久方ぶりに歩いてみたくなりました。河原は思ひのほか足場が悪く、降参して土手へと上がりました。何だか情けない気分になりました。再び河原へ下り、先程よりは随分長く歩きました。転倒に注意しながら向かう岸へと渡ると、今までいた河原の景色を見ながら休み休み、歩きました。そうこうしていると土を被った表札が落ちていました。校門は引き抜かれ、瓦の落ちた木造家屋の家が一軒、校長先生が寝泊まりしていた家です。後は一面、草ばかりでした。

吉岡辰児

雨です。軒下へとやって来るとそこには先着がいました。菅笠を被った女性です。

「この時期の雨は、村人たちの話し声みたいに賑やかですが、じきに止みます」

私がここへ来た事情を話しますと、女性は時間潰しにと昔話をしました。雨音に紛れ、聞こえてくる語りは、過去に生きた者が乗り移ったかのようにでもあり、又、偶然、神社の床下で見つけた古い書き物を手にとつて眺めているような錯覚を起こさせました。村人たちは慣習であつた春秋の祭りや盆踊りなどの諸行事を、何とか守り続けてきたのですが、その跡を継ぐ者も無く、墓守と葬儀を限りまでやり遂げた者は旅の遍路で、遍路はある日炎天下に倒れ、その姿を見つめる者も憐れむ者ありません。この

者だけは墓もなく、故に名も刻まれず、骨になり果てましたとそこまで話したところで雨は止みました。私は女性と別れました。

話の中で、女性が私に似た誰かを、どこか遠いところから見ているように感じさせられる場面が出てきたのですが、あれは私の聞き違いだったのでしょうか。更に、女性が言った「村はもう誰もいない」と言うのは、「女性以外は誰もいない」と言う意味だったのか、とても気になりました。

子供の頃、村は既に過疎が始まっていました。大人と子供を合わせて百と数十人足らずの、いや、もっと少なかつたかもしれせん。全員が全員の素性を知っていました。数十年の歳月が流れていたとしても、同じ時代を過ごしたさなかに、あのような女性がいた記憶もなく、恐らくこの村によく似たどこかの集落の話なのだと思うようになりました。菅笠を被った顔の奥など覗き込むような真似はしておりませんが、雨の降りしきる中、軒下で肩が触れる程近くから聞こえてくる声の艶、髪の毛の匂い、「びやくえ」に身を包んでいても、年頃の女性なのだろうと気づくものです。女性の母親、いや、祖母の話であれば、私と年が合う気もしました。ただ、その佇まい、そ

の落ちつき、醸し出す雰囲気などは、相当な年を重ねた者でなければ出せるものではない気がするのは妙ではありません。

これ以上詮索するのは女性に失礼な気がしました。私の家族は、私が卒業するとすぐ引越しを済ませてしまいました。当時はそのような家族は別に珍しくもありませんでした。今日私が来た理由も、永らく放置していた先祖代々の土地を国に返す算段の為でした。もはや私は、この村においては遠い過去が存在であり、例え女性がこの村の話をしていたのだとしても、それはそれで、もう、どうでもいい気がしたのでした。女性は名前を告げたのですが、話を聞いているうちに忘れてしまいました。再び女性がいいたところへ戻って、「最近、私は昔の話は覚えていても、今、言った話など、すぐ忘れてしまいがちで」とか言って、あれやこれやと聞くのも下心があるようでみつともない、気分を害されたらつまらない、もう二度と会わないのだからと思いました。後は御覧の通り、何がある訳でもない、山ばかりの景色じゃないかと自分に言い聞かせながらも、あと少しだけ、私は過去の余韻に浸りたかったのでした。やって来たのは川の曲がり具合からして校舎の裏

庭辺りでしょうか。囲った石の枠が池の面影を残していたのは嬉しい限りでした。兎の飼育小屋、校舎より高かった木、いずれもありません。私は飼育係でした。木登りの上手な上級生が木のてっぺんから手を振る姿が校門から見えたものでした。便所もあつたはずですがありません。天井には蝙蝠がいて、電球もなく、建付けの悪い扉は、どれもが一度縮まると子供の力ではどうしようもありませんでした。いつもは半開きのまま、用を足すのですが、その日はもうすぐ午後の授業が始まる時間。私は駆けて来た勢いで、つい、ボタンと閉めてしまったのでした。低学年の子がやって来たのですが、私の声をお化けと間違え、逃げてしまいました。下校の時間となり、「螢の光」が流れる中、扉が開きました。同級生全員と担任の先生の顔が、ズボンを下げたままの私の目の前に並んでいました。

どこから聞こえてくるのやら、お囃子です。耳鳴りだろうと思ったのですが、どうもおかしい。いや、おかしいのは景色の方でした。先程までは気が付かなかったのですが、校長先生の家が弦や葉に驚掴みにされ、悲鳴をあげているように見えるではありませんか。私にはここら一帯の自然が、大きな命の塊

に見えたのです。雲間の陽が叢に差し込みました。

『ああ、斬ってしまったのか!』

年輪には長年に渡る風雪で劣化し、裂け目が入っているとはいえ、どこか風格がありました。それはまるで小さな舞台そのものでした。中央には櫓が建っています。山車を引くのは三匹のカブト虫。力強く頼もしい限りです。御者は蟻螂。櫓の上では殿様飛蝗が小気味よく太鼓を叩きます。山車は川底から調達したであろう小石の車輪に川辺に咲く蒲公英の綿毛の幌。小枝や枯葉に獣毛を敷き詰めた座席。実に見事な出来栄です。櫓の周りでは踊りを踊っている蝶の姿。クローバーの葉を扇子に見立て、艶やかに舞っています。その周りでは先程から聞こえていた木の実や、落ち葉でこさえた鼓や笛を鳴らす蟻と謡を任された蟋蟀の群れ。私は蝶ばかり見ていました。私の胸の鼓動が、次第に高まってゆくのを感じておりました。

あれは卒業式の朝でした。私は飼育小屋の二匹の兎にお別れを言いに来ました。小屋の中で二匹は体を寄せ合い、そのうちの二匹がまるで鶏が卵を温めるようにして、空の牛乳瓶に乗っかっていました。瓶の中では狂ったように羽を動かす蝶の姿がありま

した。兎の腹が瓶の蓋を塞いでいたのです。私に気づいた一匹は人參でもくれると思つたのでしよう。一匹が離れると、つかい棒をなくしたもう一匹が目覚めました。牛乳瓶は転がり、蝶はまだ寒い弥生の空を、ありつたけの力で、ばたばた、ばたばた……。

夜も更け、螢が現れました。火燐の如き寂しい光です。虫たちは村人の姿となり、大きな網を夜空に向けて振り上げております。網にかかった螢は星になりました。辺りはお煎餅でも齧るような咀嚼音で一杯です。目の前に菅笠を被った女性が現れ、私も一つもらいました。星を齧る毎に思い出が蘇り、消えてゆきました。女性は蝶の化身で、あの日、村を去った私を捜して遍路までと言いました。菅笠の奥の顔が見たくなり、思わず足を踏み出すと、何かが割れる音がしました。踏んだのは骨で、つい今し方、倒れたかのように仰向けのまま、地面に横たわっていました。

目覚めた時はもう真つ暗でした。切り株に腰かけた私は、一体の古木にでもなつた気がしました。帰りは河原に下りる気にもなれず、黙々と土手を歩き

ました。やっと神社まで戻り、石段に腰を落ち着けました。社殿の床下の暗闇を見てみると、あらゆる感情が吸い込まれてゆく気がしたのでした。(了)

選評

葉山 はずみ

昔住んでいた場所を久しぶりに訪れた私は菅笠を被った女性と出会う。その女性と話すうちに、捨てるように出て行った過疎化する村で過ごした日々を回想する。この作品の良いところはいつの間にか読者を現実ではない世界に引き込む力があるところだと思う。切株の上で虫たちが賑やかに動き回り、ラストで虫たちが村人になり星となつた螢を網で捕まえその星を齧る場面は、村を捨てた私の罪悪感が浄化された暗喩なのだろうと感じた。過疎化の村を比喩にその地を覆う虫たちを使うという発想が良かった。

元町商店街を歩く朝八時

財 部 香 織

毎日朝八時、神戸駅から出発して元町商店街を歩くのが私の日課だ。

少なくともここ三ヶ月ほど同じ経路を歩いている。たまに飽きを感じて他の道を歩いたり目的地を探してみたりしているが、居心地の悪さを感じて結局いつもと同じ経路を歩く。雨の日でも、アーケードがあるので濡れずに済むのがとても気に入っている。

ここから、平日の朝の風景の一例を紹介したい。ラジオを大音量で聞きながら歩いている人、この人を見かけるのも毎朝のルーティンだ。何を聞いているのかまではわからないけれど、大きな音も余裕のある朝聞く分には微笑ましく感じる。

昼間は入ってこない、ゆっくりと走るトラックの

往来にはヒヤヒヤさせられる。邪魔にならないように、少し遠くを歩くようにしている。

朝早くから荷物の積み下ろしをする八百屋さんのコンビは、タバコをくわえたまま荷下ろしをしているように見えたので少しぎょっとした。

改装して新装開店するホルモン串屋さんの改装の過程を毎日見ている、前身の店には入ったことがなかったのが今度が入ってみたいなどひとりごちる。

長らく店を閉めていた傘屋さんの改装がはじまったのを見て、ほっとした。このまま閉店してしまうのではないかと心配していたから。

トラックに積まれた真っ赤なポインセチアの山に季節を感じたりもする。これからコーヒー屋さんの店舗の中をクリスマス色に飾るのだろう。

信号が赤でも平気で横断歩道を渡っていく人々にハラハラしたりもする。仕事に向かう人たちはみんな急いでいる。それを見て私は

「働いている人たちみんな頑張っているな、頑張れ」

と心の中でつぶやくのだ。

まだ開店していない店の窓際に置かれた、水色のクリスマスツリーが寂しそうにたたずんでいる、この店も開店したらにぎわいを見せて、ツリーも寂しくないだろう。

缶コーヒーで休憩する、店内の改装を担う職人さんたちは、楽しそうに談笑して見ていて嬉しくなる。

毎日見かけるビル清掃のお姉さんにさえ親近感を感じる。同じ時間に通っていて、私のことも覚えていてくれたりしないかな、と淡い期待を抱く。

休日である土曜日、日曜日はまた違う風景が見られる。閑散として、静まり返っている。トラックの往来もこころなしが少ない。平日の朝とは行き交う人々の顔ぶれも全然違っている。

いつもは一人で歩いているが、休日は夫と連れ立って歩くのも楽しい。あの店がなくなった、新しい

店がオープンした、馴染みの店にまた寄りたいたいね、と話しながら歩く。

朝歩くことを続けていて良かったことが三つある。一つ目は、体力がついたこと。二つ目は、朝起きて活動できるようになったこと。三つ目は、街の変化に気づけるようになったことだ。

神戸駅から西元町を経由して商店街の終点、元町一丁目まで歩くと私の足では約四千歩である。毎日歩くことの積み重ねで、いつしか夫よりも体力がついていたようだ。毎日精力的に活動できるようになった。

朝起きて活動できるようになったのは、体力がついたことと関係あるかもしれない。それに加え、朝の日光を浴びて体内時計をリセットすることができるようになったのだろう。三ヶ月前までの私は、過眠がひどくて日中も寝てばかりいた。それに比べると大きな進歩をしている。

街の変化に気づけるようになったことは、毎日歩いていけば当たり前を感じる。日々変わる風景を眺めていると、毎日元町商店街を歩いても飽きない。

元町一丁目の商店街出口にある「Goal or

Restart」と書かれた看板が好きだ。陽光を浴びて、光っているように見える。この言葉に一日をこれから始める勇気をもたらしている。実際には、このまま元町駅や三宮方面に向かうのか、それともUターンして元町六丁目方面に戻るのかを促している看板だが、精神的に前向きになる効用があると感している。

私はこの経路がとても気に入っている。これから毎日歩き続けていく。たまに他の経路に浮気するかもしれないけれど、すぐ帰って来るだろう。

選評

西村 恭子

震災作品が重なる中、30年という時を経た元町商店街の朝八時。この時間を歩きながら静かにその毎日を記している。「歩き人」の目に映る情景は淡々として静かだが、確かにそこにある町の空気と人の動きで元町という場所の姿を捉える。あの震災を経たからこそその安堵感なのかとも思うが、朝八時というこの時間の設定にも惹かれた。早くもなく、遅くもなく、かけがえない「その日」が始まる絶妙な時間とも思えて。

災害時ペットと一緒に避難を

大災害が起きたとき、家族の避難場所に飼い犬や猫などのペットも一緒に過ごせる施設を、行政が主体になって作る機運が高まってきていると感じて嬉しく思っています。

家族に寄り添って生きている犬や猫は、家族を信頼しきったその愛らしさ、仕草はおかしくもあり可愛くもあり、心を和ませ、ストレスを緩和してくれる存在です。

家族が災害に遭遇したとき、いつも足元に寄り添ってくるこの小さな命も一緒に避難するのは当然だと思えます。しかし、三十年前の阪神・淡路大震災のとき、「この非常時に犬や猫を避難所に連れてくるなんて非常識きわまりない」と、言わずもがなの、非難の目があふれていたのが実態でした。

橋本 まさ子

私は目撃しました。多くの被災者が避難していた小学校の玄関先、そこは寒風が吹きすさぶ場所、段ボールの上で一匹の猫を抱いた婦人が遠慮がちに座っていたのです。「この非常時に、たかが猫を連れて来るなんて」周囲の冷たい眼差しを感じて奥へ入るをためらつてると思いました。

「その猫を預かりましょうか」

思わず声をかけました。一瞬身構えましたが、非難されているのではないと知り、ホッとした表情をされました。しかし、びっくりしたのはその後でした。

ご婦人とのやり取りを聞いていた数人の方が私を取囲んだのです。

「我が家の猫もお願いしたいのですが」

「壊れた家に仕方なく置いてきました」

「余震が来ると崩壊するかもしれない」と、口々に、崩壊家屋に置いてきた飼い猫への思いを訴えられたのです。申し訳ありませんが預かれるのは三匹だけとそれぞれのお宅からの「預かり猫」を引き受けました。

我が家には一匹の飼い猫がいましたから扱いには慣れていました。各部屋に段ボールで作った隠れ場所やトイレを用意して、飼い主の方から、預かる猫の性格、性質をお聞きしてお世話を始めました。

どの猫も飼い主に可愛がられていたからでしょう、性格が穏やかで、何のトラブルもなく凄し、半年から長い猫で一年、預かって飼い主の方が迎えに来られ、連れて帰られました。

この体験で、私の日常は保護猫活動に大きく舵を切っていきました。近くの公園にできていた仮設住宅に避難していた人たちが引き上げた後、転居先がペット禁止だからと多くの猫が置き去りにされたのです。猫は繁殖力が強く、ほとんどの猫は不妊手術をしていなかったため自然にどんどん増えていきます。餌を求めて彷徨う猫を見かねて餌やりをするお方。当然の行為なのですが、猫嫌いの人たちとのト

ラブルは、時には警官の出動する騒ぎになることもありました。

「餌をやり続けるから増えるのだ！」と、怒号が渦巻く地域紛争は、弱い者イジメさながらの光景が繰り広げられました。一帯は「餌やり禁止」の張り紙だらけでした。

非難の応酬だけでは解決の糸口はないのです。餌やりさん呼びかけ、一緒に始めたのは、増やさないようにすることでした。まず捕獲して不妊去勢手術をして元に戻す活動です。資金をつくるためにアルミ缶の収集をし、売却を始めました。

その後、大阪の指定病院まで運べば、手術費用の無料券が使用できることをネットで知り、団体登録。仲間や行政とも連携しながら一歩一歩、野良猫たちを増やさない、一代の命を見守る活動が広がり、賛同者がふえていきました。

大阪の指定病院まで運ぶ、その指定病院が、神戸にも開院、協力の和の結末をと「神戸にゃん太の会」を発足しました。

全国に先駆けた神戸市の「人と猫との共生条例」が生まれ、強力なバックアップも得ることができるようになりました。せっかく生まれた命の重さ、人

も猫も共に生きられる地域にと、活動の和が大きく広がっていきました。

近い将来、南海トラフ地震など大きな災害を引き起こす日が来ると地震学者が語っています。いつ発生するかわからない災害でも、ペットがいる家庭は一緒に避難を話し合っておく。また行政や地域も一体となって物理的な避難だけでなく、家族を頼りにし一途に寄り添う小さな家族ペットの「こころ」も一緒に避難できる日であるを願っています。

選評

葉山 ほずみ

災害が起きた時にペットと一緒に避難できる施設が行政主体で作ろうという機運が高まっている。災害時はどうしても弱い立場になる飼い犬や飼い猫たち。飼い主としては家族の一員なのだから一緒に避難したい。けれど、非常時にそれを理解してくれる人ばかりではない。ペットと共に避難できる状態を作るといことは人の「こころ」も小さい家族の「こころ」も守ることになる。避難所のプライバシーなど人に対するものはずいぶんと進歩した。この節目の年に震災で弱者となるペットたちの命を守る提言をしてくれたこの作品を震災特別賞に選んだ。